

# 左京三条一坊一・二・八坪 の調査

—第515次・第522次

## 1 はじめに

当調査は、国土交通省による平城宮跡展示館建設予定地の事前調査であり、2010年度から奈良文化財研究所が継続して発掘調査をおこなっている。調査地は史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていた朱雀門南東の一帯で、平城京左京三条一坊一・二・八坪にあたる。

当研究所や奈良市により周辺の発掘調査がなされておりその結果、一坪では奈良時代前半に鉄鍛冶工房4棟とそれに関連する可能性がある建物数棟が存在したことがわかっている。工房の廃絶後は、奈良時代前半のうちに整地がなされ、整地後は顕著な建物群は建てられず、一坪の周囲には築地塀などの遮蔽施設も認められていないことから、広場のような使用がなされたとされている。

第515次調査は、北区・南区・東区の3カ所を対象とした(図Ⅲ-53)。ここでは、各調査区ごとに報告し、第522次調査を西区として報告する。ただし、第522次調査による西区は調査終了後間もないため概要の報告に留め、詳細は来年度の紀要で報告する。

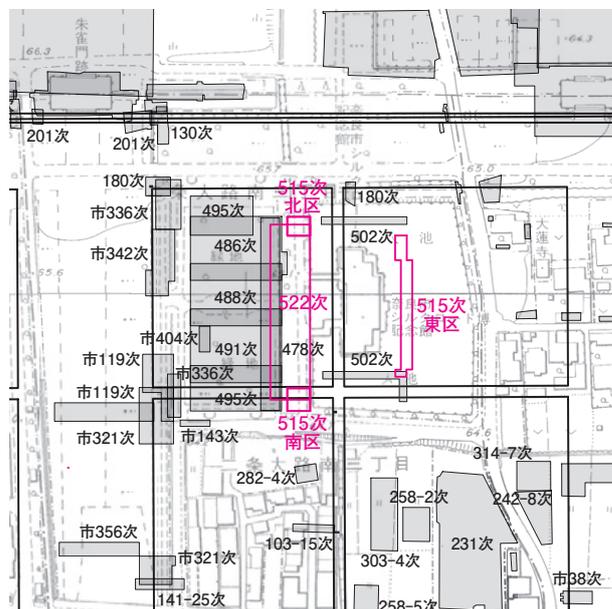
## 2 北 区

### 調査の概要

北区では120㎡(南北10m×東西12m)の調査区を設定した。調査は2013年5月16日に開始し、5月27日に終了した。ただし、調査区の北端と西側では幅2.5mのボックスカルバートの埋設により遺構面が大きく損なわれていた。そのため、調査区壁面の法面確保の必要性から、ボックスカルバートの西側では遺構面にまで掘削を進めることができなかった。そのため実際の遺構検出面は攪乱を受けていない東側の東西幅約6.0mほどである。

### 基本層序

現地表土は奈良シルクロード博にもなって整備された造成土で、1.5mほど堆積する。その下に畑地耕作土や水田耕作土が0.5m、耕土床土が0.2mほど堆積する。床土の下が奈良時代の遺構検出面である。遺構検出面は精良な粘土をもちいた整地土と砂質土の地山層からなり、標



図Ⅲ-53 第515・522次調査区位置図 1:4000

高は63.4mである。

### 検出遺構

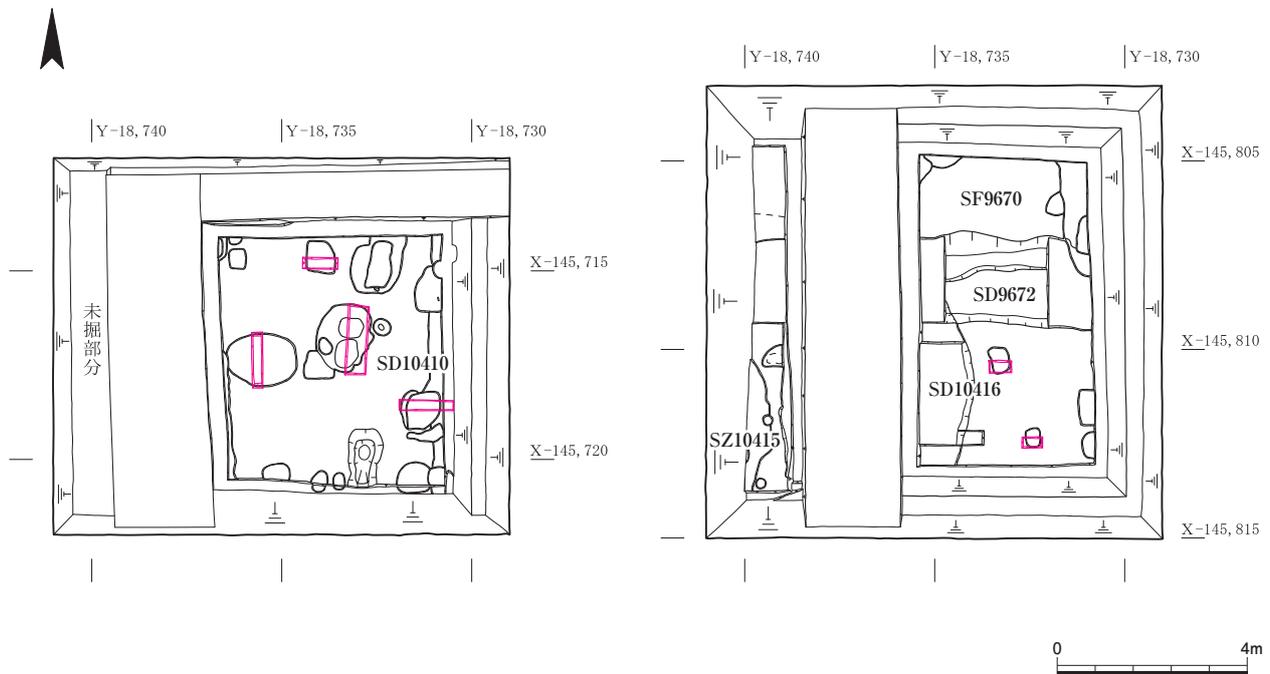
奈良時代の溝1条などを検出した。

**南北溝SD10410** 調査区東端で検出した南北溝。遺構検出面からの深さは0.2m以上。現状で東西0.6mを検出したが、東側は調査区外におよぶため幅は不明である。北側は後世の土坑の掘込みにより破壊されており、失われている。

**その他の土坑** 調査区中央から北側で南北に並ぶ2基の土坑を検出した。心々間は約3.0m(10尺)であり、掘立柱建物の柱穴となる可能性があるが、どちらの土坑も柱の抜取痕は不明瞭である。また、北側の穴の掘方の深さは検出面から0.3mと浅いなど、柱穴掘方としてはやや判然としない部分もある。掘立柱建物の柱穴と考えた場合、南側の土坑から東側と南側3.0mの位置には同様の土坑がみられなかったため、西側に展開する可能性が高い。

### 小 結

北区では奈良時代の整地土が良好に遺存しており、遺構の検出標高はこれまでの西方での調査と同様であった。一坪では西側から東側までかなり良好に奈良時代の遺構面が遺存していることが判明した。なお、顕著な出土遺物はみられなかった。



図Ⅲ-54 第515次調査北区(左)・南区(右)遺構平面図 1:200

### 3 南 区

#### 調査の概要

南区では144㎡(南北12m×東西12m)の調査区を設定した。調査は2013年5月20日に開始し、5月31日に終了した。

#### 基本層序

基本層序は北区と同様である。ただし、部分的に耕土床土が0.5mほどと北区と比べて厚く堆積しているところがある。遺構検出面は精良な粘土をもちいた整地土からなり、標高は63.0mである。

#### 検出遺構

三条条間北小路とその南側溝、古墳の周濠を検出した(図Ⅲ-54)。

**三条条間北小路SF9670・南側溝SD9672** 調査区中央部から北側にかけて検出した。これまでも奈良市による調査や第478・495次調査などでも検出されている。三条条間北小路SF9670は南北約2.1mを検出したが北側は調査区外のため幅は不明。南側溝SD9672の検出面での幅は南北約2.2mで、第495次調査の東側で検出したSD9672の幅は約0.9mであったことから、かなり幅が広い。な

お、調査区西端でも連続するとみられる溝を検出しているが、検出した標高は62.4mと低い。検出範囲が狭いため確定はできないが、上層埋土は精良で、整地土の可能性もあり、整地土に先立つ別個の溝の可能性もある。また、後述するSD10415に連続する可能性もある。

なお、南側溝SD9672の南肩から1mと3m南で一辺0.5~0.7mの土坑を検出している。第495次調査では二坪北辺の築地塀想定位置で、築地塀にともなう足場穴や添柱穴の可能性のある小穴列SX10080とSX10085を検出しており、距離は離れているものの同様の性格のもの可能性がある。

**古墳SZ10415・周濠SD10416** 調査区西部で検出した、古墳時代後期前半の円墳とその周濠。古墳SZ10415の墳丘本体は失われており、周濠SD10416のみが遺存する。周濠SD10416は東肩が円弧状をなすが、西肩はボックスカルバートに破壊されており幅は不明である。北側は三条条間北小路南側溝によって破壊されており、埋土から埴輪が大量に出土した。検出範囲が限られるため確定はできないが、周濠の外周は10m程度に復元できる。

(川畑 純)

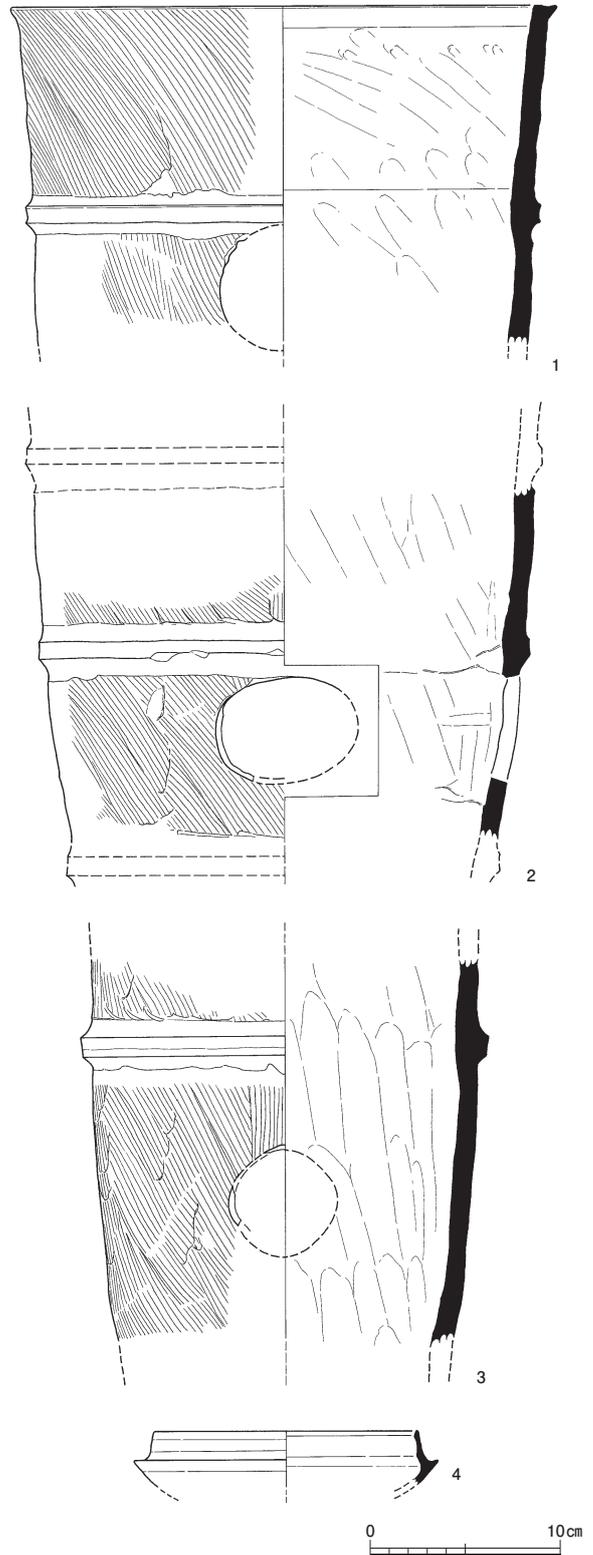
## 出土遺物

**土器・埴輪** 第515次調査南区では、整理用コンテナ計10箱分の土器が出土した。内訳は、土師器、須恵器、埴輪などからなるが、埴輪が大半を占める。そのうち、古墳周濠SD10416出土の須恵器と埴輪について報告する。

SD10416出土品の多くは円筒埴輪だが、石見型埴輪などの器財埴輪片とみられる破片も数点確認した。ここでは、形態や製作技術など製作時期を考える上で重要な属性が良好に把握できる円筒埴輪3点分を図化した(図Ⅲ-55-1~3)。さらに共伴した須恵器杯H1点についてもあわせて図化した(図Ⅲ-55-4)。

1は、口縁部からその下の突帯周辺まで残る破片で、復元口径28.6cm、残存高18cm、器壁の厚さ8mm前後をはかる。円形透孔を有するが、各段の透孔の数や配列は不明。窖窯焼成と考えられ、外面は青灰色を呈し、硬く焼き締まる。外面全体に右下から左上方向のタテハケ調整をおこない、その後突帯を貼り付ける。ハケメ1単位の幅は2cm前後。突帯は、連続ナデによって貼り付ける。内面は、右下から左上方向に指ナデ調整するが、口縁部から2.5cm前後下った部分に棒状の物体によるとみられる圧痕が確認できる。圧痕は、ほぼ同じ高さで2~4cm間隔で計6カ所確認できた。これらの圧痕は、内面を全周していた可能性があり、圧痕が付く方向が指ナデの方向とほぼ合致するため、指ナデにともなう道具が当たったのかもしれない。また、指ナデ痕の後に圧痕が付くため、あるいは埴輪の乾燥にともなう何かしらの道具の付着痕の可能性も否定できないが、いずれにせよ推測の域を出るものではない。

2は、残存部最大径26.2cm、残存高18.2cmの個体。窖窯での焼成とみられ、内外面とも灰色を呈し、須恵質で焼き締まっている。胎土には径1cm前後の大粒の石英粒を含む。円形透孔を有し、穿孔方向は逆時計回りである。外面は、右下から左上方向にタテハケ調整をおこない、ハケ調整後に突帯を付す。ハケ目1単位あたりの幅は1.8cm前後。突帯は、断続ナデによって貼り付けられ、上部に爪の擦痕を残す。断続ナデは、貼り付け後横ナデによって突帯を調整する断続ナデA。推定できる突帯間の距離は、上の段で約10cm、下の段で約12cmと一定しない。内面は、右下から左上へ向けて指ナデするが、あまり丁寧な仕上げではなく、一部に粘土紐巻き上げ痕を残す。



図Ⅲ-55 SD10416出土埴輪・土器 1:4

3は、残存部最大径20.2cm、残存高20cmをはかる個体。1・2と同じく窖窯焼成と推定されるが、全体が黄褐色を呈し、焼成もよくない。胎土は、2と同じく径1cm前後の石英粒を含む。1・2と同じく外面は右下から左上方向にタテハケ調整をおこない、ハケ調整後に突帯を貼り付ける。ハケ目1単位の幅は最大2.3cm。突帯の貼り付けと調整は、2と同じく断続ナデAであり、突帯上部に爪の擦痕を残す。

4は、須恵器杯Hの身。復元口径13.8cm、最大径16.0cm、残存高2.9cm。青灰色で、焼成良好。口縁部の立ち上がり角度や高さなどの特徴から、本個体は陶邑田辺編年のMT15～TK10型式の所産と考えられる。

SD10416出土円筒埴輪は、製作技法の特徴から川西宏幸のいうV期、すなわち6世紀前半頃に位置づけられる<sup>1)</sup>。またこれら円筒埴輪は、突帯により区画された各段間の長さが一定するといった規格性をそなえるなどのIV期以前の要素が消失している。また、出土遺物は一括性が高く、4の須恵器からみた年代観と、円筒埴輪から導出した年代観とは、いずれも整合的である。(青木 敬)

### 小 結

南区では三条条間北小路SF9670とその南側溝SD9672を確認した。ただし調査区の西端では想定される位置で東西溝を確認したものの、検出面は整地土の下の可能性があり、これまでの調査での検出状況とは異なる。今後の調査による検討が必要である。また、周濠のみの遺存ではあったが古墳を1基検出した。出土した埴輪や土器から古墳時代後期前半の円墳とみられる。周濠の埋土は埴輪を含む土で一度に埋められたとみられ、間層がみられず南側溝SD9672が切り込んでいることから、平城京の条坊設定と整地にともなって古墳は削平され、その埋土で周濠が埋め立てられたと考えられる。(川畑)

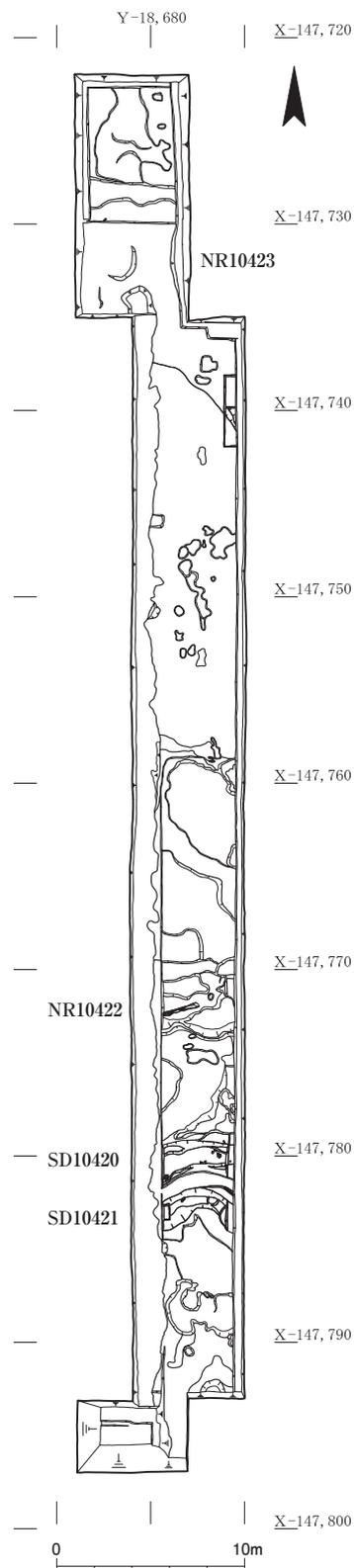
## 4 東 区

### 調査の概要

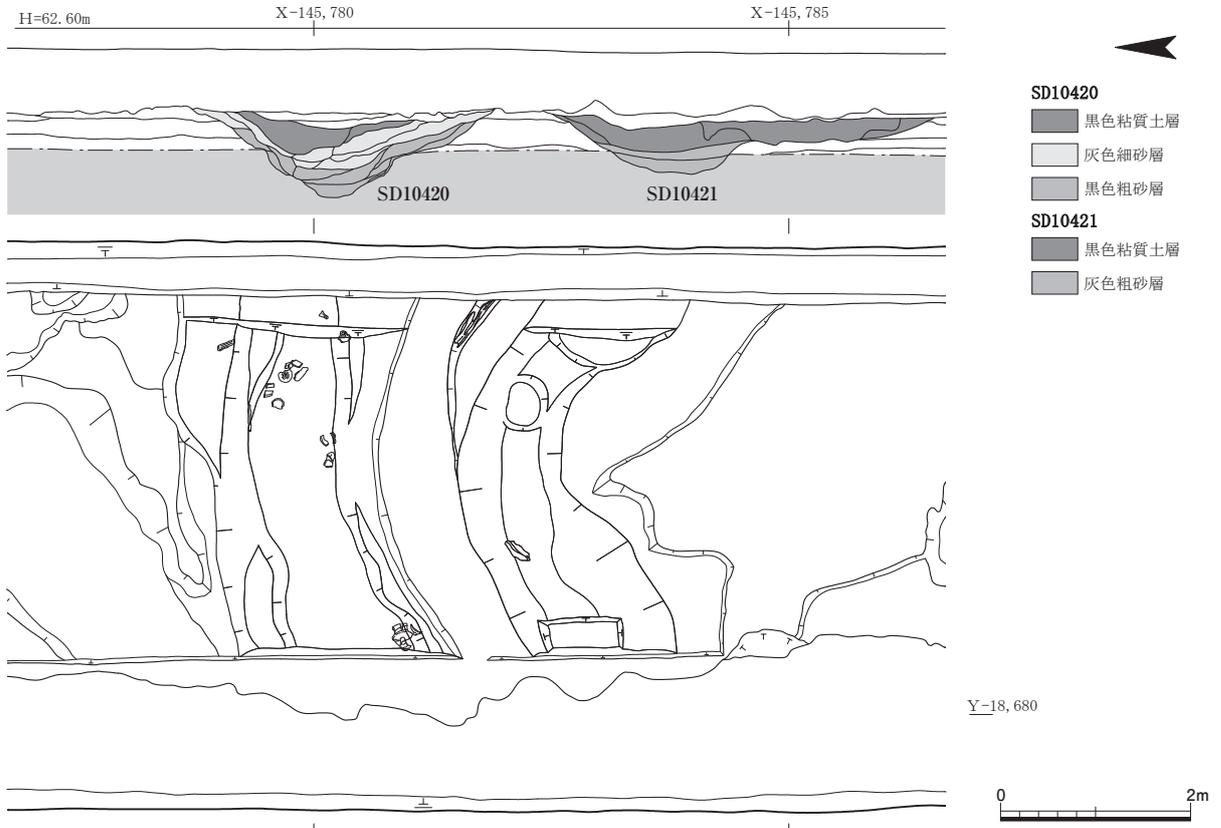
東区では450㎡(南北75m×東西6m、18㎡は502次南区と重複)の調査区を設定した。調査は2013年11月5日に開始し、11月29日に終了した。

### 基本層序

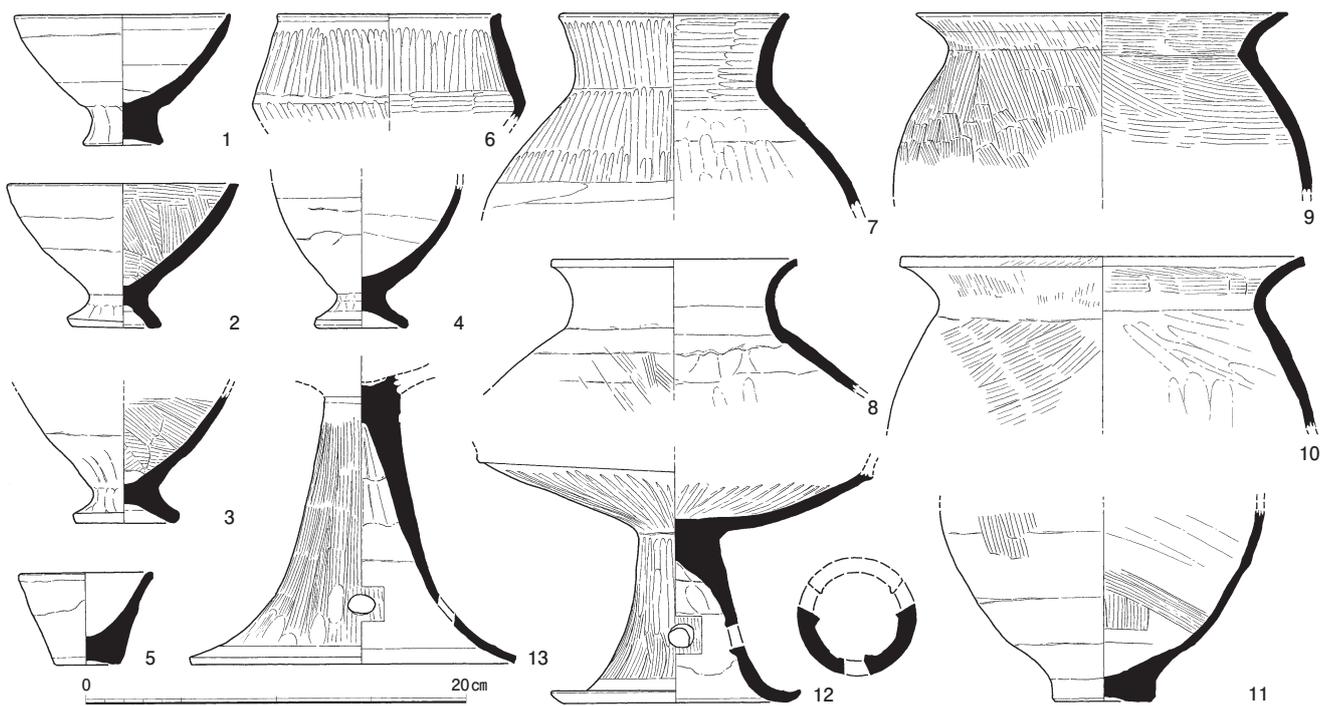
上から、旧建物の建設にともなって入れられた地盤改良剤による硬化土(厚さ約50～60cm)、旧北新大池の堆積



図Ⅲ-56 第515次調査東区遺構平面図 1:400



図Ⅲ-57 SD10420・10421 遺構平面図・土層図 1:80



図Ⅲ-58 SD10420出土土器 1:4

土(約10~15cm)、灰色砂層(約10~30cm)が堆積し、標高61.0~61.4mで地山である灰色細砂層、黒褐色粘質土層に達する。遺構検出面の標高は61.0~61.5mである。

#### 検出遺構

弥生時代の溝2条、時期不明の流路2条を検出した。

**東西溝SD10420** 調査区南側で検出した弧状に曲がる東西溝。幅約2.3~2.5m、深さ約0.7~0.9m。溝底の標高は60.6m。埋土は3層に分かれ、上から黒色粘質土層(厚さ約0.4m)、灰色細砂層(約0.1~0.3m)、黒色粗砂層(約0.2m)が堆積する。黒色粘質土層は、溝が埋没する過程で再度溝状に掘り込んでおり、弥生土器や種子を含む有機質遺物が多く出土した。

**東西溝SD10421** 調査区南側で検出した弧状に曲がる東西溝。SD10420から約0.8m隔てた南方に位置し、同じく弧状に曲がる。幅約1.5~2.2m、深さ約0.3~0.5m。溝底の標高は60.8m。埋土は2層に分かれ、上から黒色粘質土層(約0.2m)、灰色粗砂層(約0.2m)が堆積する。SD10420と同時期の弥生土器が少量出土した。

**流路NR10422** 調査区中央で検出した時期不明の流路。幅約2.6~3.0mで深さ0.4m。自然木1点が出土した。

**流路NR10423** 調査区北側で検出した時期不明の流路。幅約8mで、標高63.3mまで掘削したが、湧水が激しく、底面は確認できなかった。自然木3点が出土した。

#### 出土遺物

**土器** 東西溝SD10420・SD10421から整理用コンテナ5箱分の弥生土器が出土した。特にSD10420黒色粘質土層から多く出土した(図Ⅲ-58-6)。両溝ともに弥生土器V様式の特徴を示す。(小田裕樹)

**植物種実** 東西溝SD10420、SD10421からは、植物種実が多量に出土した。そのため、2mm目と1mm目の篩を用いてこれらを採取した。計数は終了していないので、概要を述べる。両溝ともにモモ核、メロン仲間、ブドウ属、キイチゴ属、クヌギやアラカシなどのコナラ属(幼果、殻斗含む)、タデ科などが検出された。前の4つのように食用のものと、後2者のように自然に混入したと考えられるものがある。特にメロン仲間、ブドウ属、コナラ属、タデ科は3層に分かれた各層で認められる。SD10420では、3層のうち黒色粘質土層からのみ、炭化コメ、ヒョウタンが出土している。(芝康次郎)

#### 小 結

本調査で検出した弥生時代後期の遺構は周辺に当該期の集落が分布していたことを示す点で重要である。なお、平城京左京三条一坊八坪に関わる古代の遺構は後世の削平により確認できなかった。(小田)

## 5 西 区

#### 調査の概要

西区では1,953㎡(南北93m×東西21m)の調査区を設定した。調査は2013年12月16日に開始し、2014年3月28日に終了した。調査区の位置は、第478次調査の東側で、第515次北区と南区の間にあたる。詳細な報告は来年度におこなう。

## 6 ま と め

今回の調査では、北区では奈良時代の整地土を確認し、南区ではこれまでも検出されていた三条条間北小路SF9670とその南側溝SD9672の延長部分を検出するなど、北区と南区では奈良時代の遺構面が比較的良好に遺存していることが判明した。東区では奈良時代の遺構面は完全に失われていたものの、弥生時代の溝を検出し、南区で検出した古墳とともに、平城京造営以前の土地利用の一端が明らかとなったといえる。

北区では詳細は不明ながら南北に軸を揃える土坑を検出しており、西側へ展開する建物の柱穴となる可能性が高い。一方、南区では整地土の下で溝が確認されるなど、これまでの調査とは異なる知見も得られている。これらについては、来年度報告する西区の状況の精査とあわせて検討を進めていく必要がある。(小田・川畑)

#### 註

- 1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978。